

16日深夜に起きた地震で、最大震度6弱が観測された東京電力の福島第一原発。廃炉作業が進む同原発では、溶け落ちた核燃料や使用済み燃料が残る原子炉建屋などに大きな被害はなかったが、様々なトラブルに見舞われた。

2011年の事故後、東電は福島第一原発で想定する最大の地震の揺れについて、従来の600ガル（揺れの勢いを示す加速度の単位）から1・5倍の900ガルに見直した。東電はこの想定に沿って、原子炉建屋などを再評価し、耐震性に問題ないとの結論づけた。今回の地震の揺れはその想定を下回る221ガルで、原子炉建屋などに目立った被害は今のところ、見つかっていない。

一方で、放射性物質を含む水の漏洩や、火災報知機の誤作動などが相次ぎ、東電は17日の廃炉作業を中止し、現場確認や復旧作業に追われた。

5号機では、建屋5階にある使用済み燃料プールの冷却ポンプが揺れで自動停止。その後、設備に異常がないことを確認し

## 福島第一原発でトラブル相次ぐ

### 燃料プールの水漏れ ■ 格納容器の圧力低下

たうえで復旧させた。5号機と6号機では、プール内の水が揺れであふれ、一部は建屋内のダクトを通じて3階や4階にも漏れ出したという。5号機のタービン建屋や事務本館では複数の火災報知機が作動。いずれも誤作動と判明したという。

福島第二原発や東北電力女川原発（宮城県）でも、使用済み燃料プールの冷却ポンプが一時止まった。

福島第一の1号機では、原子炉格納容器内の圧力が地震後に低下し、周囲の気圧と交わらない状態になった。通常は、格納容器内に水素や酸素がたまるのを防ぐため、窒素を入れて内部の圧力が高くなるようにしている。東電は、窒素を入れる量を増やすなどの対応を検討するといふ。

敷地内に1千基以上ある処理済み汚染水をためるタンクにも影響が出た。17日夜時点で、85基のずれが確認された。タンクは地面に固定せず、ずれ動くことで地震の揺れを吸収する仕組みだといふ。

（藤波優、川村剛志）